

博士論文審査結果の要旨

高媛 『観光の政治学―戦前における日本人の「満州」観光―』

本論文は、戦前の日本人の「満州」観光に光を当て、「帝国圏」の膨張と崩壊にともなう「観光圏」の伸縮過程を辿りながら、観光という「磁場」で成立する複数の権力の伝達回路を浮かび上がらせ、「観光を取り巻く政治」と「観光の生み出す政治」の両面を明らかにしようとするユニークな歴史社会学的研究である。

「西洋」/日本/中国の「三つの近代」が重層的に拮抗する満州にスポットを当て、その観光をめぐるポリティクスを帝国圏の空間的な伸縮との関係で浮き彫りにしようとする本論文のプロジェクトは、ほとんど先行研究のない未踏の領域への学問的挑戦であり、その豊富な資料やデータの渉猟と解析とともにきわめて高く評価すべき学問的水準を達成している。

さらに特筆すべきは、本論文では、観光という磁場の成立を、「ゲスト(ツーリスト)」「代理ホスト(コロニスト)」「ホスト(ネイティブ)」の三者が織りなす重層的なせめぎ合いのプロセスとして描くことで、帝国と植民地との間のヘゲモニーの動的な分節化にかなりの成功を収めていることである。

以上のような本論文の独創性と実証性および理論的な水準などを総合的に勘案し、本論文は博士号(社会情報学)授与に値する研究であると判定するに至った。

以下、「満州国」の成立を画期としてその前後とそれ以後を扱った第一部(第一章から第四章まで)と、第二部(第五章から第八章まで)について概要を明らかにしておきたい。

満州観光の前史を扱った第一章では、満州のイメージが「辺界」から「富源」へと転換し、その情報源が拡大するとともに「帝国のまなざし」が誕生していく経緯が歴史社会学的に述べられている。

第二章は、豊富な資料を駆使して「ろせった丸満韓巡遊」と「満州合同修学旅行」のふたつの事例を取り上げ、「満州観光誕生」の具体的な歴史に迫っている。

第三章では、満州観光の担い手に焦点を絞り、在満観光機関や観光産業が満州観光をどのように組織し、演出していったのか、そのディテールを明らかにするとともに、さらに文化人の満州観光の具体例を丹念に拾い上げ、満州観光が国民の中に浸透していく経緯を浮き彫りにしている。

第四章では、内地・朝鮮・満州を周遊する観光イメージの生成を、当時の遊覧券とその販路を手がかりに具体的に明らかにし、さらに満州旅行がブームとなり、地方都市にまで拡大、浸透していくプロセスを、地方新聞や旅行社、旅行会の記録などによって記述し、満州観光隆盛の断面を鮮やかに描き出している。

第二部の第五章は、「満州国」の成立を契機とする「満蒙狂」といわれるほどの旅行ブームの到来を、発掘された貴重な日記や観光聯盟協会の活動などを素材に鮮やかに浮き彫りにしている。

ツーリズムにおけるゲストとホストの関係を演劇論的な関係に置き換えながら、観光バスがめぐる満州諸都市で上演された「劇場帝国」のドラマトゥルギーを展開している第六章の「「楽土」を走る観光バス」は、本論文の白眉であり、最も読みごたえのあるチャプターになっている。

第七章では、満州観光を通して日本が、「西洋」に対する「代理ホスト」の役割を果たしつつ、アジアに対して「西洋」の「エージェント」の役割を引き受けていった、その両義性にスポットを当て、満州観光の重層的な意味を明らかにしている。

第八章は「満州国」崩壊後、引き揚げ者の中で醸成されたノスタルジーに注目して、戦後の中で旧満州観光がもった複雑な意味を論じ、今後の新しい研究課題につなげている。

以上が全体の要旨であるが、資料の精度に若干の修正を必要とする箇所が2、3あるとはいえ、博士論文としての学問的な水準はきわめて高く、よって、本審査委員会は本論文が博士(社会情報学)の学位に値するものとの結論に達した。